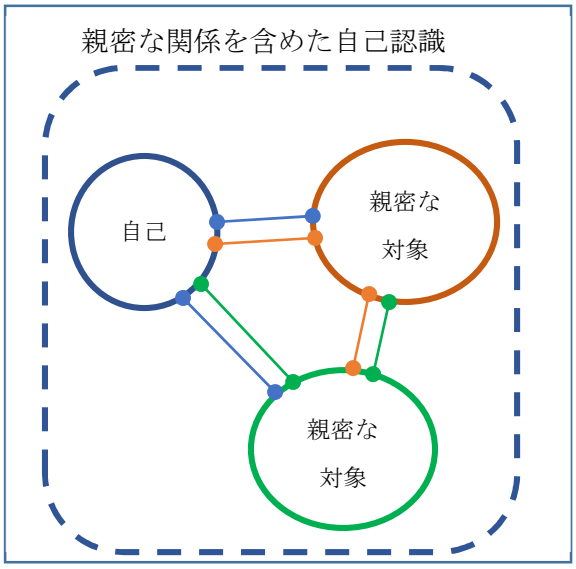
第４章　私の成立

進化し複雑化した生物の親には、子供と自己同一化しようとする力が働く。しかし働く対象は子供であり、働く期間も限定的になっている。この機能は、脳が認識する良い関係と、ホルモンなどの代謝が支えている。人は、この制限を、大幅に超えて、自己同一化する。



言い換えれば、自己同一化の抑制が、うまくできない生物が人のである。

人は、親密間関係（親和性の良い関係性の方向に強いもの）を、自己同一化し、解除がうまくできない。

そして、親密な関係をもとに、次々に自己同一化できそうな対象を、自己同一化する。

自己の拡大が起こる。同時に、拡大した自己のなかにも、認識の強弱が起こる。

この結果、自己の中に、自己と外（他者、物、現象など）の認識ができる。ここに外から見た自己である、己が出来上がる。認識は、統合されるため、己と自己を統合した認識、私が出来上がる。

人は、間接認識する己から見た外と、直接認識する自己から見た外を、統合した認識、私を生きることになる。

ここにおいて、人としての認識が成立し、人が成立する。

第４章　　補足　個、自己、己、私の区分

生きる物（生物）の単位として出てくる、個、自己、己、私の区分のまとめ

個　：一つの集団、個が生きていると一つの生物になる。
　　単位で、特に何かを特定しない。

自己：生物の単位、認識の上では、認識する側に当たる。したがって、該当する自己からは認識できない。
　　私の中では、認識する側になる。

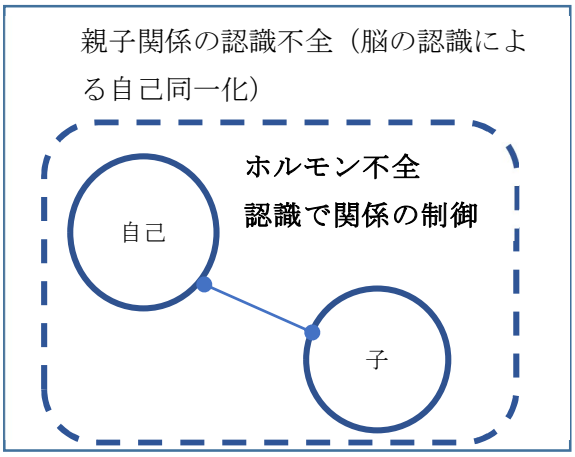
己　：認識される側の自己。私を私として、認識するときの自己（個）。

私　：自己と己を、統合したもの。この統合によって私（自己）は、私（己）を私として認識できる。

第４章１項　認識不全

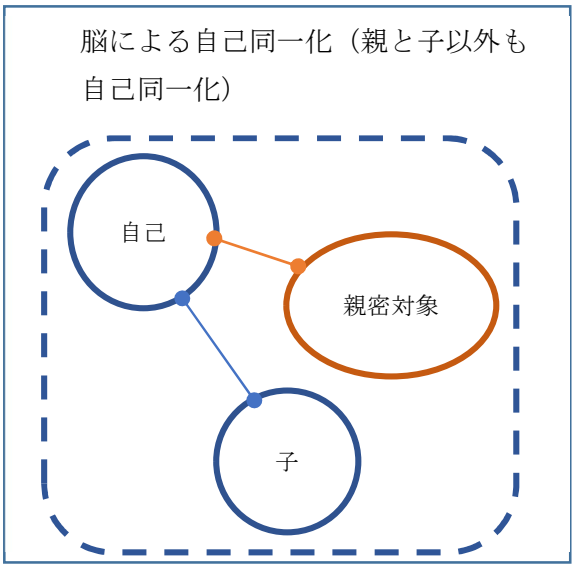
普通、生物は、外の対象を自己同一化しない。例外は、子供ぐらいである。その中で哺乳類などの生物は、長い期間、子を育てるので、子供を自己同一化しやすい。しかし期間は限定されており、同一化を解除し、他者として扱うことができる。

主に、ホルモンなどの代謝と、脳の認識が関係している。



この状態で、ホルモンなどの代謝に障害が起こると、脳の認識に、関係性の確保を、頼らざる負えなくなる。脳の認識では、関係性が重要になる。関係性の強弱が優先される。

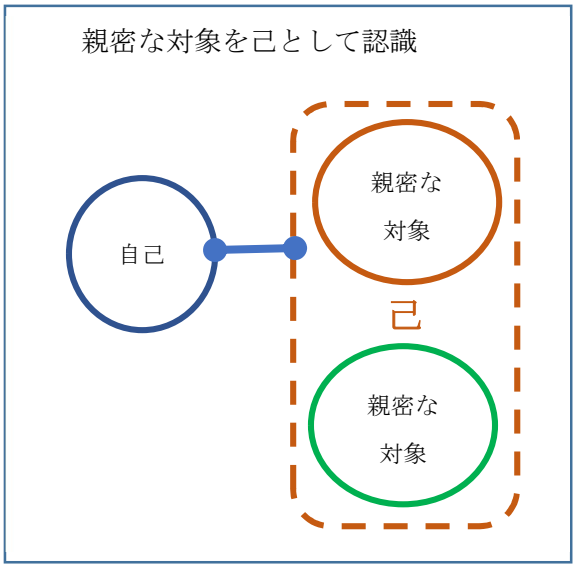
人は、同一化に認識不全が起こり、子供以外でも親密な関係をもとに対象を、自己認識してしまう障害を起こした。



また同時に解除にも同じ障害が起こる。主に脳の削除機能（関係性の強弱）で、解除することになる。結局、脳の機能で認識を否定するか、認識が固定化するか、認識できなくするか、認識を忘れることでしか解除できなくなる。

第４章２項　私の誕生と人の成立

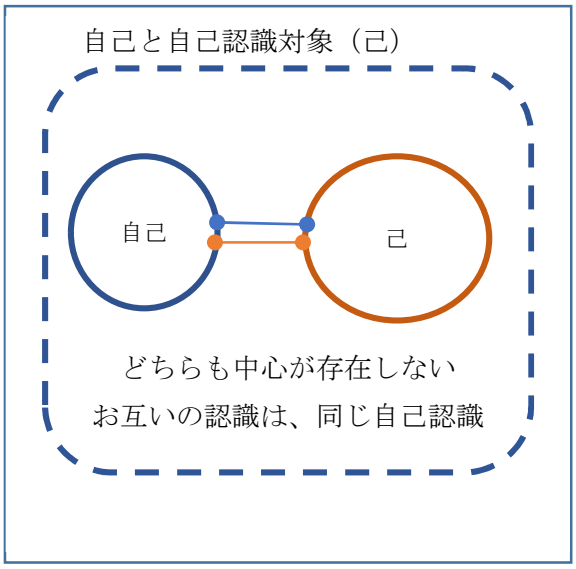
脳が主導権を握って、関係での自己認識化が進むと、自己認識化した対象との、関係が強くなる。そして自己認識対象が己として、一体化する。



自己と対象の認識には、常に強弱がある。その強弱が、己に反映されると、己の中にも、対象の強弱ができる。

自己の中の自己である中心は、常に認識の受け手側である。そのため認識としては、認識できない存在である。また同一化する己も、対象が変更、変化するため、その中心を、認識として固定化することはできない。探してもあるようでない状態である。

二つの認識できない中心は、一番関係が強いが、認識の変化が小さいので、忘れることになる。しかし認識の中心としては存在する。また己から、自己そのものに向けた認識も、自己の認識として組み込まれる。

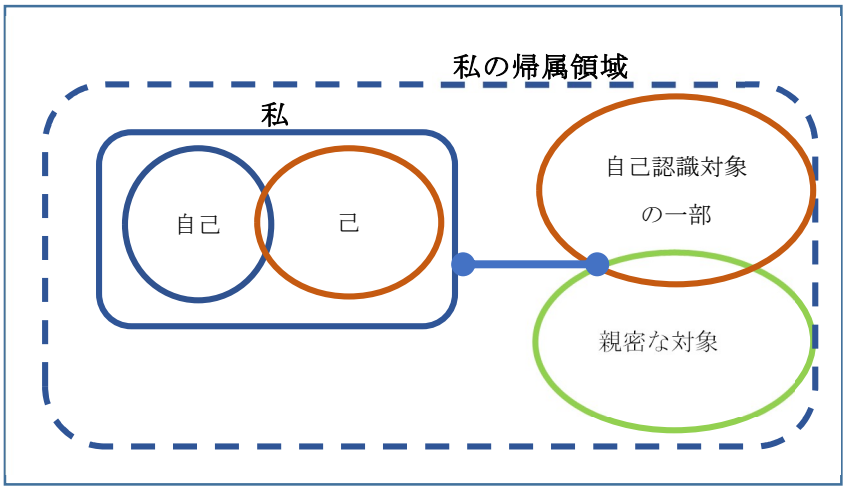


この二つの自己の中心は、お互いこれが自己とする対象が無いので、一体化することになる。

自己と己の中心は一体化し、私が生まれる。

私を私（自己と己）として認識できる存在、人が成立する。

人とは、私を認識する存在である。



己にならなかった自己認識の一部と、親密な関係から、私の帰属が出来上がる。

第４章２項補足　脳が足りない

ある特定の対象に対する認識では、自己側が安定していることが、重要である。私は自己と己があるため、対象を認識すると、自己から見た認識、己から見た認識、対象を自己化した認識、その二つの関係の認識など、認識が多重化する。認識が双方向になり、さらに複数の対象同士の認識が、必要になる。認識はマトリックスになり、それを処理する脳には、処理能力の高速化と、複雑な関係性への対応が要求される。１つの関係の変化や出現に対して、複数の認識を処理する事が必要になる。そして脳は常に、処理不足になってしまうことになる。

ある意味、人の脳は、処理能力の限界があるため、認識のマトリックスを、すべて正常に処理できない。

そしてこのマトリックスは、自己同一化できる対象とできない対象とで、マトリックスに濃淡ができ、相互的な認識部分と相互的な認識できない部分とで、二重化することになる。